症状の改善だけではなく、個別面談によって傾聴・共感のケアを提供したことで「もう少し頑張ってみよう」「できる時だけでもやってみる」「話を聴いてもらって良かった」などの声が聞かれ、数名の治療継続につなげることができました。

居上さんは、治療を継続している患者に関しては、生活習慣病が多く見られ、基礎疾患のコントロールも必要になると言及。iPadを使用したデータ管理は、継続的なケアの評価及び患者に対する看護介入の機会として有効だったこと、「治療を迷っている患者」に対して生活背景・生活習慣を踏まえた上での傾聴・共感の看護ケアが有効であることが示唆されたこと―を研究のまとめとしました。

最後に、今後の課題として、CPAP療法の看護ケア確立に向け、看護師が管理栄養士や理学療法士などとも連携し、減量や生活習慣の改善にも積極的に関わっていくことが重要であると述べました。

●五稜会病院（札幌市北区）
思春期患者の自傷行為減少の理由に関する一考察を発表

高橋さん

医療法人社団五稜会病院（千丈雅徳院長・吉野賀寿美看護部長、193床）の高橋宏旗さんは、札幌市病院学会で「思春期患者の自傷行為減少の理由に関する一考察～患者の語りに焦点を当てて～」を発表しました。

高橋さんはまず、自傷行為について「自殺を目的とせず、非致死性の予測を基に自らの体を傷つけ、心理的苦痛を経験させる行為」という定義を引用。「若者に比較的ありふれた現象」と言われていることも紹介しました。そして、自傷の問題点は、一時しのぎに過ぎず、本人の根本的問題点を解決できず、繰り返すことで耐性を獲得していき行動がエスカレートしてしまう可能性があり、それが最終的には自殺につながることもある、と指摘しました。

同病院にも思春期患者の中で自傷行為を繰り返し入院する患者が少なくありません。そうした患者は自傷行為が無くなる、または減るなどの行動の変化があって退院していくというプロセスを経ます。研究は、思春期患者の語りから行動化の減少理由を抽出し、何が変化に影響を与えたのかを検討しました。

思春期患者A氏を対象にした事例研究とし、電子カルテからA氏の言動の変化、同時期の看護師の関わり、家族・環境の変化に関する情報を取集。情報を時系列ごとに追跡、A氏の語り、行動の変容のきっかけ、要因に焦点を当て、回顧的に分析しました。

A氏は10歳代後半の女性、診断名は混合性不安抑うつ障害です。いじめを受け、気分の落ち込みや希死念慮が出現しました。協調性があり、努力家、自己肯定感が低い様子が見受けられました。自傷行為が治まらず1回目の入院となりました。不調を言語化できず、入院中も自傷行為が見られました。一旦は自傷行為が減少し、退院しました。その後、再び自傷行為が頻発するようになり再入院となりました。言語的表出が増え自傷行為が減り、さらに、希望や目標を言葉にしたり、主体的行動が見られるようになり、自宅退院となりました。

受容・思いの言語化の促しと環境調整により能動的に行動変容

A氏の変化から「自傷行為が多い」「思いの言語化が増える」「主体性が増える」の3つの時期に区分しました。「自傷行為が多い」時期は、一言二言話すのみの表出で、「切りたい」「死にたい」を繰り返し、自傷前に表出は無く事後報告でした。この時期の関わりは、本人の言動に対して受容的に関わること、ノートでの意見交換をメインとしました。その結果、「思いの言語化が増える」時期となり、大学に進学したいという希望や自傷の理由についての表出があり、また、自傷前にスタッフに相談するようになりました。この時期には、A氏に指示的に関わりながら、一緒に自傷以外の対処方法を考えていきました。

すると、少しずつ主体的な行動が増え、「主体性が増える」時期に入っていきました。この時期には、切る切らないではなくて、「困り事をどう解決するかを相談したい」と話したり、高校を卒業し大学に進学するための方法を考えられるようになりました。スタッフは、家族や学校との調整、楽しかったことの振り返り、イライラの訴えがあった時にその都度の感情コントロールを行いました。

変化に影響を与えたものとして、高橋さんは、継続して本人の行動に受容的に接し、行動を抑制せず言語的表出を促したこと、復学のための環境調整、家族調整―が挙げられると考察。これらが自身を客観的に見る力の成熟につながり、衝動行為に向けられていた内的エネルギーが、自尊感情を持てるようになり、目標に向かって挑戦するなどのポジティブ方向に行動を促進させることに向けられるようになったと分析しました。

高橋さんは①思いを言語化するよう促し、受容していく関わりは、自尊感情、自発性や援助希求の能力向上につながり、ポジティブな行動へ変容する、②環境調整することで、本人が持っている力が引き出され、自傷行為以外の対処方法が身に付くーと、この事例研究をまとめました。

●クリアコー
認知症予防3年間の経

介護老人保健施ト千歳（稲葉和紀澤学療養師長、定ハビリテーション科長は、第9回千究会で「認知症予防きりクリア』3年後の地域での役割した。

2014年に厚た「オレンジプラて、同施設では同知症予防サロン「ア」を開設しまし設後3年間の経過今後地域にどう貢を探りました。

楢山さんは「すの名前の由来を「活動を通じて、「つを大切に、「き」：

●このページは医療機関等の看護部門の話題を紹介しています。皆様からの情報提供をお待ちしております。